



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ語否定表現の語用論的研究：口承文芸テキストを中心に〔全文の要約〕
Author(s)	Nurmi, Jussi Henri Sebastian
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16491号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95174
Type	doctoral thesis
File Information	Jussi_Nurmi_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：ヌルミ ユッシ ヘンリ セバスティアン

学位論文題名

アイヌ語否定表現の語用論的研究—口承文芸テキストを中心に—

本論文は、アイヌの口承文芸における散文説話（北海道沙流方言の *uwepeker*）を中心に、アイヌ語における否定表現が持つ談話機能を調査する試みである。先行研究においては、特に英語や日本語などの言語の物語（*narrative*）における否定表現の談話機能について明らかにされており、否定の使用によって談話における重要な情報が聴衆に伝達することができると主張されている。これらの否定の談話機能や語用論に関する先行研究や理論に基づき、アイヌの散文説話における否定表現の物語における役割について調査を行い、どういった役割を果たすことが見られるかを明らかにすることを目的とした。本研究では、「否定（*negation*）」として捉えたのは、否定辞「*somo*」を通じて形成される否定の断定的な平叙文のみならず、「*iteki*」などという禁止の副詞を伴う否定的な命令文、否定的な疑問文、否定の条件文、および通常「否定」として認識されているが、形態論的に否定に位置づけられない独立した動詞も研究対象とした。本稿では、アイヌ語の極めて深刻な状況のため、著者自身が収集した資料ではなく、既に刊行された北海道アイヌ語の沙流方言の資料を使用することとした。その中で、否定表現・発話の談話機能に関する定性的調査を行い、それぞれの機能の現れる頻度を明らかにするための定量的調査も行った。

本論文は9章で構成された。第1章では、研究の背景と目的を述べた。また、本研究で使った言語データや研究方法、否定の談話機能や否定の捉え方、そして物語の捉え方について述べた。

第2章では、本分析に当たって、関連する理論について述べた。まず、否定に対する記述的アプローチを紹介し、標準的否定および文否定について述べた。その後、否定の解釈に欠かせない「作用領域（*scope*）」と「焦点（*focus*）」の概念を紹介し、アイヌ語における否定表現について述べた。次に、否定発話に関する語用論的観点や先行研究について述べた。否定の解釈には、典型的には推意（*implicature*）と強調の原則（*co-operative principle*）や、非対称性（*asymmetry*）や非情報性（*uninformativeness*）が使用されており、否定は限られたコンテキストにしか使用できないことの説明として用いられている。言い換えれば、否定が使用できるには、それに相当する肯定の前提（*presupposition*）が必要であることを指す。さらに、物語における背景（*background*）と前提（*foreground*）の対立、および否定の解釈に重要な背景情報（*background information*）とコンテキストやスキーマ（*schema*）などといった、否定発話の分析に重要な理論について述べた。また、先行研究における否定の談話機能と本論文におけるアプローチを紹介した。本研究では、「否認（*denial*）」「対比（*contrast*）」「評価（*evaluation*）」という三つの否定の基本的な機能以外に、物語のストーリー展開に対して働いているいくつかの機能にも注目した。それらは「問題（*problem*）」と「非問題（*non-problem*）」の対立や、ストーリーに影響を与えない否定の「中立的な使用」、どの事柄がすべきなのかを表す「モラル評価」や「要求」、ストーリー大きく展開させる「転換点」、および否定発話の連続およびそれによる物語にお

ける高まった緊張点である。最後に、より具体的に物語と語り手の捉え方について述べ、物語を個人の経験談というよりも、フィクションのようなストーリーとして捉えた。語り手に関しては、物語の主人公が「語り手」あるいは叙述者として捉え、物語を実際に語る話者をインフォーマントとして捉えた。

第3章では「否認 (*denial*)」という命題を否定するように働く否定発話の機能について、アイヌの物語における使用について考察を行う。本論文では、否認を、前のコンテキストで明確に現れる命題の「明示否認」および、期待された「前提」の「暗示否認」と二つに分類するアプローチをとる。分析した結果、暗示否認は否定発話の全件の6割を超えており、明示否認は3%も上回らないことが明らかになった。このような結果からは、物語は情報が一方的に提供される傾向があることが推測できる。また、登場人物が会話を行う場面も物語の中で多く現れるにもかかわらず、一方の登場人物が他方の登場人物が発話した命題を否認することが確認されなかった。なお、明示否認が現れるコンテキストの多くは、登場人物が自らの命題を打ち消すことが確認される。暗示否認が多く用いられることは、暗示否認を通して新情報そのものが提供されるためであると思われる。

第4章では、「対比 (*contrast*)」という否定発話の一般的な談話機能およびそれがどのようなコンテキストでアイヌの物語に現れるかについて述べた。先行研究では、全ての否定がある程度対比的であるという主張がされており、本稿でもそれに従ったが、特に分析中に注目したのは肯定と否定が同時に現れるコンテキストである。すなわち、肯定と否定は同様の対象について情報を提供するコンテキストである。否定が先に発せられるか、そうでないか、先行研究で挙げられている一致関係 (*matching relationship*) と系統的繰り返し (*systematic repetition*) という理論を使用した。アイヌの物語は、否定が先に発せられる対比的な構造が、特に登場人物が正体を主人公に見せるという文脈で使用されることが確認された。一方で、肯定が先に発せられるのは、特に主人公が他の登場人物に指示をされるコンテキストにおいて確認された。さらに、他の対比的な意味のコンテキストについても述べた。そのようなコンテキストは、例えば否定と肯定の命令並べて発せられるものや、否定要素を伴う最上級表現 (*superlative expression*) や、条件文である。否定と肯定の命令の場合は、まず否定で望ましくない行為が禁止され、その代わりに望ましい行為が肯定で命令され、どちらも主人公に重要な情報を提供している。最上級表現として捉えた構造においては、否定要素が使用されるが、語用上では肯定的な意味合いが成立される場合が確認された。本分析に限り、物語に現れた否定を伴う条件文も肯定的な意味を成立させるコンテキストが確認され、物語におけるレトリカルな言い方の一種として見なした。

第5章では、「評価」という否定発話の機能に注目した。先行研究に基づき、評価を「語る価値」を伝える要素として捉え、ストーリーを展開させる「全体評価 (*global evaluation*)」とそうでない詳細の描写を行う「部分評価 (*local evaluation*)」と区別した。部分評価は、主にそのコンテキストに追加情報を提供し、あるいは何らかの細かい事柄の描写として機能しているということが明らかとなった。また、確認された例が少ないが、インフォーマントのその物語に関するコメントも部分評価として見なし、あるいはインフォーマントが言い間違いを直すための自己修復も部分評価の一種として捉えたが、この二つは物語のストーリーとの関係性が薄いため、本研究の主な研究課題と異なる現象となる。次に、全体評価について述べたが、全体評価は物語全体を対象とし、ストーリー展開に影響を与えるものである。すなわち、全体評価として見なせる否定発話は、物語を進行させる効果が強く、そのコンテキストにおいて重要な情報を提供しているものである。

第6章においては、ストーリー展開に関する否定発話の様々な機能について述べた。このような機能の主要なものは、「問題」「モラル評価」および「転換点」である。これ以外に、否定発話の連続についても考察を行った。「問題」は、何らかの不良な状況を指し、物語の登場人物にとって「問題」として捉えられる状況を表すものである。問題は特に物語の冒頭に現れ、その問題が提示されたため、主人公が解決法を探すとストーリーが展開する。このように問題は全体評価として機能することが多いが、問題に対して良好な状況を示す「非問題」という現象も否定表現を通して示される。本分析によれば、非問題は部分評価として機能することが多かった。問題と非問題という対立以外に、どちらにも該当しない「中立的な」使用も多少現れ、こういった場合の否定発話は例えばストーリーにおける詳細の描写として機能していることが明らかとなった。また、「モラル評価」は、話し手は相手がすべきである行為を表し、例えば否定的な命令の際に、命令を発する登場人物は他方に何らかの行為をさせたくないことを示す。モラル評価に類似している範疇として、「要求」という談話機能も立てたが、本研究で特に否定的な疑問文を通して登場人物が他方に物や行為を求める際に用いられる傾向が見られた。「転換点」として機能する否定発話は主に、ストーリーは聞き手・読み手が期待した方向性と異なる方向性に展開する場面を指す。なお、より軽い転換点も多少現れ、特に物語の結末が近づいている指示として捉えられる否定を通じて示された転換点も見られた。最後に、否定発話の連続とそれに伴う緊張感の高まりという現象について、先行研究では確認されているが、本研究で分析した物語に限り、こういった現象がそれほど見られなかった。しかし、否定発話の連続が例えば物語の冒頭において主人公のスキルについて描写される際に見られた。

第7章では、「否認」として機能不可能な否定的な構造の中で、「命令」「疑問」「断定」「条件」を扱った。否定的な命令文の全てを全体評価として捉え、話し手が聞き手に何らかの行為を禁止するため、同時にモラル評価としても機能している。否定的な命令は例えば、物語の冒頭や結末に現れるが、冒頭に現れるものはストーリーの大きなモチーフとなり、主人公が禁止された行為を行うというパターンが見られる。すなわち、禁止に従わないことが、ストーリーが展開することに繋がる。一方、結末に現れる禁止文は、主人公が自らの子供に教訓とも呼ばれる重要な情報を提供する場合もあり、その物語の要点が要約されるようにも機能していると考えられる。続いて、本研究で扱った物語における否定的な疑問文の多くは「Xをしませんか」のような構造をしている間接的な要求として機能するものであった。否定的な疑問文も命令と同様に全体評価として機能することがほとんどであり、対話部分に現れると一方の登場人物が他方にものを求めて、他方が断らない傾向がある。そのため、否定的な疑問文もストーリーを展開させる性質を持っているといえる。否定の断定 (*assertion*) も扱ったが、偽であることを否定するための否認と異なり、真であることを主張するための現象として捉えた。否定の断定は、特に同様の命題が前のコンテキストで一度否認された後に、繰り返される否定発話のことを指す。このような使用は、ある事柄を強調するためのものであると考えられる。さらに、否定の断定として捉えたのは、いわゆる埋め込まれた (*embedded*) 否定句や名詞を修飾する際の否定要素であり、これらは主に部分評価のように詳細を描写しているように機能しているという分析結果を得た。

第8章では、レトリックとしての否定表現を取り扱い、さらに物語のいくつかの部分における否定発話の割合の分析結果について述べた。物語を二つの観点から分け、第一観点は物語の「冒頭部分」と「結末部分」という対立であり、第二観点は叙述者（主人公）の立場からの「語り部分」、そして主人公を含めた登場人物の会話から成立する「対話部分」の対立である。冒頭と結末における否定発話を特に定性的に分析を行った。冒頭では、次のような否定発話が見られる。第

一に、全体評価として機能する「問題」を示す否定発話が現れ、これらによってストーリーが展開する。第二に、登場人物の性質やスキルなどを強制的に描写し、「私ほどの狩りの名人が他にいない」や「誰にも教わっていないが生活するのに重要なスキルXを持っている」などのようなコンテキストにおいて現れる。このような否定の使用は、「非問題」という対象登場人物に対する良好な状況を表し、レトリックの中で誇張法として機能していると捉えられた。第三に、先行研究において慣用句と呼ばれる「食料に不自由しない」を意味する表現が多く物語の冒頭に現れる。これは、冒頭に発せられた後に、物語のストーリーが展開し、出来事の話が開始するため、ある種の転換点としても捉えられた。この同様の発話内容が結末部分においても現れることがあり、主人公が苦労や困難な状況を乗り越え、「ハッピー・エンド」に至ったことを表示すると考えられた。すなわち、結末においてもこれを転換点として捉えることが可能であり、この発話の後にストーリーの主な出来事が終了し、物語の末が近づいていることが聴衆側にも伝達される。これと他に、主な結末部分に現れる否定発話は禁止文であり、結末という位置で発せられるためストーリーもそれ以上展開しないが、聴衆に対する教訓あるいは物語の内容のまとめや繰り返しとして機能していると考えられた。

また、「語り部分」と「対話部分」の区別をしたが、それぞれに属する否定発話の割合が約同程度であった。語り部分は、主人公の目から見た物語世界の描写であるため、詳細の描写が行われる領域としても捉えられ、半分以上の否定発話が部分評価を示した。また、会話が実行されないため、明示否認や命令や疑問も少なく、7割が暗示否認であり2割が否定の断定を示した。暗示否認を通じて、叙述者は聴衆に新情報を提供していると考えられた。一方で、対話部分は7割以上の否定発話は全体評価を示し、登場人物が他の登場人物に重要な情報を伝えていることが明らかになった。興味深い発見として、全発話のうち8割以上が主人公以外の登場人物が発したものであることが挙げられた。これは、多くの物語の場合は、他の登場人物がストーリー展開に対して重要な役割を果たすことや、主人公にとって物語における重要な情報源となっていることを示唆すると考えられた。

さらに第8章では、否定をレトリックとしても扱った。アイヌの物語においては、否定要素が様々な強制的な言い方の際に用いられ、二重否定にも現れた。最も頻繁に現れたのは、意味的に肯定的なコンテキストであった。例えば、「*nep a-e rusuy ka somo ki* (私は何も食べたくない)」という表現は「食料に不自由しない」を意味すると解釈され、否定要素が使用されているが、意味上では良好な状況を示している。また、「*pak isonkur isam isonkur a-ne* (私は、(私ほどの)狩りの名人が他にいない(ような)狩の名人だ)」という表現も、登場人物の非現実的な能力を表すのに使用され、現実世界と物語世界の差異も示し、このような表現が現れると、聴衆側でもその登場人物の物語に対する重要性が明らかになると考えられた。なお、多少否定的なコンテキストにおいても誇張な否定が確認され、例えば「*nupe sak siri ka isam* (涙がない様子がなかった)」といった表現で、「ずっと泣いた」という肯定の命題が表された用例を扱った。

第9章では、全章をもう一度まとめ、本分析結果を評価し、肯定的な否定や受け手指向(*recipient design*)や先行研究で挙げられている否定の使用の原則についての考察、研究成果や今後の課題について述べた。研究成果としては、アイヌ語の否定の語用論およびアイヌの散文説話に現れる否定発話の機能と意味の理解を深めたことが挙げられた。また、否定がアイヌの物語においてもストーリーに対する重要な情報を提供する手段の一つであることが考えられた。なお、ストーリー展開に関係のない場合も確認されたが、否定が使用可能な領域が幅広いことも明らかとなった。否定が使用される場合は、聞き手の注意を引く効果があり、いわゆる受け手指向

として機能していることも含まれていると本分析で確認された。また、否定が使用されているが、コンテキスト上では肯定的な意味合い、あるいは良好な状況を表すコンテキストが確認された。こういった否定の使用は、文学作品における修辞技法の一種としても捉えられ、聴衆に登場人物のストーリーに関する重要性について示唆をするものであると考えられた。

ただし、理論面では、先行研究のアプローチがやや足りない部分もあり、今後の課題としてはより細かく物語を分析することが残っている。例えば、全ての否定が実際にある程度対比的か、また、否認として機能する否定発話は具体的に何を否認しているか、暗示否認の場合どういった背景情報に基づく期待が否認されているかなどといった点についても考察を行う必要があると考えられた。また、本研究は北海道アイヌ語の沙流方言に限ったが、道内のほかの方言やサハリン方言との対照研究を行う必要もあり、それぞれの方言の物語における否定の使用の類似点、相違点を調査することが今後の課題の一つである。